



Title	アートとコミュニケーション / アーティストの授業風景
Author(s)	山本, 麻紀子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 38-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アートとコミュニケーション

山本 麻紀子

人と初めて会う。その時は、その人の小さなしぐさのかけらや言葉の端々にその人を読み取ろうとします。それは、自分とのギャップだったり今までの経緯と照らし合わせながら、いかにそのギャップをたくさん発見して自分の心を驚かすことができるか、つまりそれをとてもし新しい何かを見つけた時の気持ちよさ、そこに快感を感じるのです。そして、もっと知りたい、もっと知って欲しいという流れに導かれて行くのです。教えてもらったら、教えてあげる。これは自己紹介の法則。そして、それらの情報は、次にあう時に、また次に新しく出会うあなたの時のために、私のここにストックされていくのです。

私は、京都市立芸術大学に入学してからいつもコミュニケーションをテーマに制作を続けています。そもそも、私の生まれた家庭環境には芸術や美術といわれるものは全く見当たらないものでした。友達で何か少しでも秀でた才能のあ

る人にとっても憧れ、絵がうまい人と出会えばうらやましいなと思い、そして自分の無能さにいつもがっかりしていました。そんな私だったのですが、ひょんなことになぜか自分で表現するという美術大学を目指すことになったのです。ここ最近までその急転換の原因が全く分からなかったのですが、この年になって順々と自分の歴史をひも解いて行つてようやくこれかなという結論に辿り着きました。

私は、中学生の頃から何故か友達からいろいろな悩みを相談される存在でした。恋の悩み、進路の悩み、人間関係の悩み、家庭の悩み。そのたびに私は、全力投球して少しでも気が晴れるように少しでも前向きになれるようにいろいろなことを一緒に悩んで考えて、少しでも重荷を取り除こうと試行錯誤していました。でも結局、その悩みは当人だけにしか本当に理解できることはなく、そしてそれを克服したり解決に導くことができるのも、それもやはり当人ではないというところはどうしてもぬぐいきれないことだと感じていました。

しかし、そうであったとしても、その人が私に悩みをうちあけてくれたという事実で感謝し嬉しく思い、最大限のおかえしをしたいと心から強く思っていました。そしてその時に、私なりにできることを必死に考えました。みんなに手作りの「おももり」をあげよう、その人のこ

とをいっぱい思つて、その悩みが消えることも祈りつつ一生懸命作つて、1人1人にあげていたのです。いろいろな思いのこもつたおももりに手紙を添えてこっそり手渡していたのです。それをもたらしたみんなは、私の念力が通じたのか、必ず元気になり前向きになり晴れ晴れとした笑顔になって感謝の言葉をくれたのです。その時に、自分の心をこめまわつて作つたもの、それが人の心を動かして、ずっとまわりついていた辛さからの突破口を開くお手伝いができたことに、とてもとても幸福を感じたのです。「ありがと」と言われるたびに、本当に強く喜びを感じていました。その度に、きつと、「あ、何もできない私でも自分の作つたもので、人の心を動かすことが出来た」と思ったのです。言葉でなくても、自分の手で作り出すことによって、人とコミュニケーションをとることができた、そのことが私のもの作りに目覚めた原点なんだと最近気づいたので

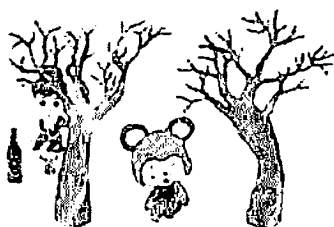


イラスト 山本麻紀子

す。



福井高校で授業をする山本さん(左)と授業をコーディネートした高嶋(右)

つまり何が言いたいかと言うと、人間は生まれたからには必ず1人1人違うのです。見た目も性格も価値観も感覚も、絶対同じ人間なんていない。それこそが一番素晴らしいことであり一番面白い点なのだと私は思います。だから、知りたいたし接したいし知らないことに会ってみたい。そんな自然な好奇心が、私を動かしています。そういう勢いのある好奇心は、高い観察力と長い持久力を備えているのです。そんな好奇心が、1人1人に大切に向けられる。そして、そこからコミュニケーションへと発展していくのです。

1人1人を、まるごと存在として受け止める。

存在として把握するのです。つまりは、どうんと構える。おおらかになるのです。それって、実はほんとに難しい。でも、おおらかになったら生きて行く視野が一気に広がりました。

そのことに気づかされることになったきっかけがカナダへの留学でした。英語もうくに話せない状態のまま、準備も特にならず、適当な生活必需品と英和辞書だけを持つての留学でした。そんな状態であったからこそ、生活していくためにも美術大学の中で自分を表現していくなかでも、人とのコミュニケーションをなんとかしてでもとらざるをえなくなり、でも、言葉は通じないし生活環境も違う。そんな状況で私に何ができるか。いきつまった時にでてきた答えは、言葉が通じなくても共有できる何かは世界共通に必ずあると信じて、とにかく作品を作りまくって、それをツールに人とコミュニケーションの冒険をするしかないということでした。その結果、死にものぐるいゆえにうまくできた作品たちは、私をおいに助けてくれました。せつばつまれば何でもできる。怖いものなんて決してない。いつも新鮮な気持ちで物事を捉える。今思えばおこすと、この経験をふんだからこそおおらかになれるんだと感じています。

自分の知らない世界にいきなり飛び込んで行くこと。実際に飛び込まなくてもちよっとだけ

いつもと視点をずらしてみたり。たちどまって景色を逆さまに見てみたり。そんなささいな行為がや細工によって見え隠れする一瞬に、面白いコミュニケーションの切り口が潜んでいるのです。そこに気づけば、自然に表現というものに結びつくと思います。そうやって毎日を色付けて鮮やかにしていくものこそが、アートの役割だと信じてこれからも新しいコミュニケーションの冒険を続けて行きたいと思っています。

やまもとまきこ

1979.12.28生まれ、現在京都市立芸術大学大学院
構想設計専攻二年在籍。コミュニケーションを作品
づくりのテーマにし、展覧会、講演会、ワークショップ、
展覧会キュレーション、など幅広い分野で活躍
中。今後の活動予定は、9/10-9/26にカメラのナニ
ワ心斎橋本店全館でビッグプロジェクト、10/11
秋の関西大運動会プロデュース、9月 新開地ア
ートストリートプロジェクト 新開地マップ制作編集
(9月完成予定)があり、12月にはベルリンで展覧会
を予定している。

2003年1月19日(日) 高井高校「出会いの哲学」

講師 山本悠紀子

〈授業の流れ〉

1. 自己紹介：ビデオ作品の紹介

- ・100人間（ビデオ作品）
- ・your time / my time（プロジェクトのドキュメント映像）
- ・How uses this?（コラージュ本）
- ・Tibicklin factory（カタログ、グッズ紹介）
- ・Little tintim（手描きアニメーション）
- ・NHK出演ビデオ（ビデオ、カタログ）

→私の主なプロジェクトの説明とビデオや画像での紹介をしました。ビデオを見せるとそれまで寝ていた子も起きてちゃんと見てくれました。作品に対する質問などは特にあがらず、でも真剣に聞いてくれました。

2. ワークショップ：「何でもないものを持ち寄って意味のあるものを作ってみよう」

こちらで用意したものと休憩時間集めて来てもらったほんとうにいらなくなったもの（例：ジュースのストロー、シールのがす、壊れたがさ、ぬいぐるみ、おもちゃ、布など）を使って新しい意味をもったものにつくりかえるワークショップ

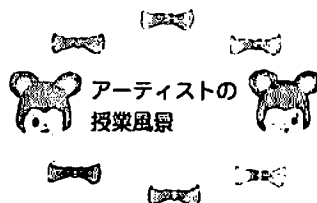
- ・いらないものどうしをくっつけて何かの目的を果たすものを作る
 - ・意味のなくなってしまうものに新しいネーミングをつけてちがうものとして成り立たせる
 - ・どうしようもないものは、ある存在に想定して意味付けする
- などなど。ネーミング方法などの紹介プリントも配布しました。

→教室にバラけてみなさんが座っていたせいか、やる気満々の生徒とそうでない生徒がいました。でも、こちらから何かものを持って行けば一応考えてくれていました。

中にはとても面白いものをどんどん作ってくれた女の子たちもいたり、一つのをじっくりと友達と一緒に頑張って作ってくれたり、特に難しいと構えずに普段のままで楽しんでやってくれていました。

〈感想〉

授業の最後に書いてもらった感想文には、ちゃんと私の言いたかった「日常の何でもないものも、少しだけ自分の視点をずらして見直してみるだけで新しい世界観を自分で作り出すことができ、そうやって平凡な毎日に色付けしていくことは日常の暮らしの延長にあり決して難しいことではない。それを発見できるかどうかはこころがけしだい。」といったようなことも理解してくれていたことを知って、とても嬉しく思いました。寝ている生徒もいたり、興味なさそうにしている生徒もいましたが、アンケートを見るとちゃんと内容は聞いてくれたようで全体としていい授業だったと思います。ただ、作品の数が多かったでせいでとても駆け足な授業になったのでバタバタ感はぬけませんでした。もう少しゆとりのある授業構成をするべきだったと反省しています。



2004年5月8日(土) 洛星高校 『生命と哲学』授業 ～つつこむことからはじめよう～

講師：山本直紀子

〈授業の流れ〉

1. はじめに：高嶋さんから簡単な紹介
2. 「自己紹介」
・NHK出演ビデオ「くると関西おひるまえ」
→ビデオを見つつ自己紹介 enjoy weekday project ～サラリーマン・OL編～の紹介
3. 「人と初めて出会う そのときに」
・100人問題集バージョン（約5分）紹介
→みんなにうけました。さすが男子校。男の子のほうがこの手の作品はうけがいいです。
4. 「言葉が通じなくてもコミュニケーションはうまれる」
→カナダ留学での制作活動の紹介
・TIBICKLIN FACTORY →カタログとグッズ紹介
→実物のグッズも持って来たのでそれをみせつつ紹介。実際にみんなにまわしてみると面白そうに見ていました。
5. 「生活の中でのこころがけ」
・毎日の出来事に「つつこみ」をいれることからはじめよう
→私の用意した何でもない2つの写真に「つつこむ」という実践の時間をとりました。



山本さんがカナダで作った作品
nose warmer。生徒達も大受け。

〈感想〉

実践の時間にその他の作品『dairy training book』やTibicklin factoryのカタログなどをまわしてもらうとともに、私もみんなの座席の方へ回っていろいろとお話しました。みんな真剣に見たり読んだりしてくれていて、ほんとに少しでも疑問があればすぐに質問してくれました。特に『dairy training book』に関しては異常な人気で本当に驚きました。時々、個人的に話していて毎日が楽しくなればよいなといったようなことをボロリともらした生徒さんもありました。でも、彼らも彼らなりに毎日を色付けする工夫をしているようでとても興味深かったです。やはり、授業に対する真剣さや真面目さ、それと同時に素直で純粋なこともあって、みなさんのおかげでとてもやりやすい環境でした。

ただ、実践の時間を特別にとってから発表してもらうという形をとったのですが、写真をプリントにしてそのとりに「つつこみ」を書いてもらうという形式は、

うまくしっくりいってなかったように感じ反省しています。そもそも「つつこむ」ということは、わざわざ書くという行為は向いていませんし、だからといって写真をパネルにしてみんなに見せてとどろろつつこんでいってもらうという形もどうかとは思っています。もう少し事前に考慮すべきだったかと思っています。今まで見たこともなかったことに触れてもらってそのギャップを彼らなりに理解しようと努力してくれていたことをとても感じました。

